

下呂温泉合掌村と富山県民謡祭。

岡哲文

二〇一五年六月二日。下呂温泉合掌村。

下呂温泉は一〇〇〇年以上の歴史を持つ。林羅山が有馬・草津とともに日本の三大名泉の一つとして数え、延喜から天暦年間に湯ヶ峰山頂から温泉が噴出したといわれ、また開湯伝説として、薬師如来が一羽の鷲に化身して湧出を知らせたという白鷲伝説がある。泉質は「アルカリ性単純温泉」、無色透明で滑らかな肌触りで美人の湯といわれる。JR高山本線下呂駅周辺に多くのホテルや旅館が立ち並び、多くの観光客で賑わっている。

「下呂温泉合掌村」は、下呂温泉街の近くにあり、白川郷や五箇山から移築した一〇棟の合掌造りがある。特に旧大戸家住宅は天保四年（一八三三）から弘化三年（一八四六）まで一三年にわたって建てられ、一九五六年（昭和三一）に国指定重要有形民俗文化財に認定され、一九六三年（昭和三八）に、御母衣（みほろ）ダム建設の際に保存展示するために解体移築された。翌月四月に下呂温泉合掌村が開業した。事前予約制だが、旧大戸家はボランティアの方のガイドを受けることが可能である。また旧大戸家以外にも旧岩崎家の民俗資料館、影絵昔話館「しらすぎ座」、旧伊並家の合掌茶屋などがある。

下呂温泉合掌村へは、下呂温泉駅から定期バスがほぼ一時間間隔で運行されており、約六分で到着する。私は下呂温泉内の国民宿舎に宿泊し、このバスを使って合掌村へ行った。当日は快晴で蒸し暑かった。バス停を降りて大きな駐車場を通って受付を済ます。受付の建物も合掌造りの旧大溝家である。

まずはボランティアの方と一緒に「旧大戸家住宅」へ行く。編み笠、蓑をはおり、「下呂温泉合掌村」と書かれた法被を着た二村静夫氏、飛騨弁で話すのが特徴である。ボランティア歴は六年である。

大戸家の説明から入る。この家は白川村御母衣（みほろ）字上洞（あへほら）から移築され、翌六三年に飛騨郷土館としてオープンした一九六九年（昭和四四）に下呂温泉合掌村に改称した。以前紹介した御母衣の「旧遠山家」とも近い距離にある。屋根のかやがすごくきれいだが、二〇一四年（平成二六）に新しくふき替えた。一万束の萱を使いその量としては四トントラック一〇台分に相当する。萱は御殿場や高山、白川郷から調達し、片面で約二五〇〇万、両面で約五〇〇〇万円する。



下呂温泉合掌村の受付（旧大溝家）、大戸家の外観とボランテイアの二村氏。

この家は名主（飛騨では名主「なぬし」と言わず、「めいしゅ」と言う）だったためケヤキが使われている。

江戸時代、ケヤキは神社仏閣ぐらいいしか使用が認められなかったが、この家は格式が高かったためにふんだんに使えた。またこの家は自民党の代議士平沢勝栄氏の母親の家であり、一九四五年（昭和二〇）にここで平沢氏が誕生した。この家は三十八代続いたが、当主の方が二〇一四年に亡くなり、独身だったために系統が絶えてしまったが、大きな仏壇、鎧、金屏風等様々なものがあつた。また、江戸時代には名主以外に医業も営んでいた。

この家が重要文化財に決定した決め手は棟札で、建築された天保四年と家族十九名が書かれていたことであつた。前述したとおり、この住宅が国の重文に認定されたのは一九五六年（昭和三一）、次が以前紹介した「遠山家住宅」で一九七一年（昭和四六）十二月二十七日、最後がこれも以前紹介した荻町の「和田家」が一九九五年（平成七）十二月である。この家にも所謂「チョウナバリ」という山で自然に曲がった木を梁に使っており、それが室内から外に出ている。優れた耐震構造になっている。

各部屋を回って説明を受ける。この家にも入口に馬屋があり、そこには竹の籠、部屋の間取り図、民具以外に、牛とそれを世話する人の人形が置かれている。この大戸家でも各部屋には人形が置かれて当時の様子を再現している。以前荘川の里を訪問した時も、この人形が各部屋に置かれていたのを見たことがある。囲炉裏のある母屋には丸い藁製のござがひかかれている。ここで火を焚いて部屋を暖め、濡れた蓑や藁製の長靴を乾かした。

夜なべ仕事をした作業部屋や、前述した平沢勝栄氏の生まれた部屋、そして箱階段の上を見ると、大人衆の就寝部屋がある。この家でも縁の下で煙硝を作っており、五箇山や白川郷の合掌造りを見学すると、そういう話はよく耳にする。五

箇山の上梨にある合掌造り「村上家」でも、囲炉裏に座って当主から煙硝づくりの話の話を伺うことができるし、菅沼集落内の合掌造り施設「塩硝（えんしょう）の館」では、さらに詳しく煙硝づくりの展示を見ることが出来る。藁に馬の小便を混ぜ、（人間の小便も混ぜたようだ）、葉草、それから蚕のフン（蚕は二階で飼っていた）、や食べかすの桑の葉を混ぜて、一メートル八〇ぐらいある桶に入れて発酵して作った。

上段の間を上がって仏間にいく手前に、壁に数珠がかかっていた。今は一つしかないが、昔は住居していた人数分かかっていた。ここから各人、自分用の数珠を取って仏前で拝んでいた。莊川や白川郷・五箇山も含めて、浄土真宗の信仰の篤い地域であり、金ぴかの絢爛豪華な仏壇を置いている。



絢爛豪華な仏壇、これらの人形が部屋のうちここに置いてあり、昔の生活を偲ばせる。平沢勝栄代議士の写真パネル。

おとしし遠山家へ行った時に展示してあった、白川郷の大家族制度についても説明をされた。自給自足で耕地面積が狭く、結婚して分家を出せず、家の後継者たる長男のみが結婚し、次男以下は結婚できず、実家で働くだけだった。これも限られた耕作地しか持たなかった昔の人々が、生活を維持していくための方法であった。結婚できない次男以下に対して「夜這い」という習慣があった、そのため「夜這いの間」という小さな部屋があった。今ではもうそういう習慣は廃れてしまったが、昔は農村では普通に行われていたようだ。夜這いについてはこれ以上ここで言及することを避ける。

二村氏から「シヤギ」というものを見せてもらった。漢字では捨てる木「捨木」と書き、一八歳まで使っていた、今でいうトイレットペーパーである。これで用を足した後始末をした。それに新聞紙は絶対に使わせてもらえなかった。その理由として新聞紙は養蚕に必要なだったためである。この辺りではほぼ養蚕があったから生活が成り立っていたのであり、必ず「おかいこさま」と呼んでいるがら

い、養蚕は大切なものとされた。新聞紙は蚕様が繭になる時に出る小便を吸わせるために何枚も下に敷いたために、痛みを我慢して捨木を使った。「それからちり紙、トイレットペーパーへとともに歩んだ歴史を語る」と、中日新聞二〇一五年十一月一七日号にもある。

ここには日本全国から観光客が訪問し、昔はトイレットペーパー代わりに様々なものを使っていたという話になり、日本の人口の半数が藁、それ以外は葉でしかも大体五、六種類使った。最近来た方ではトウモロコシの皮を使ったという話もあった。それで外国のトレイ事情も分かり、インド、インドネシア、フィリピン、ネパール、カンボジア、ニュージーランドにエジプト、全部海外旅行をした方から教えてもらった。そのため六年に全国から礼状が二五三通来た。外国人、香港から来た観光客から一四通ももらった。

大戸家の裏側に合掌足湯があり、その近くに旧遠山家の板倉(倉庫)がある。一八一〇年(文化七)に建てられ、板で壁を二重にしている。一九六三年(昭和三八)に御母衣(みほろ)から移築された国の有形文化財である。思わぬ所で遠山家関係のものに出会った。屋根の茅は苔むし、壁の木材ははだけていて、それは遠山家と同じだった。

二村氏は元大工だったので、合掌造りのガイドも、使用している木の種類や建築方法などかなり詳細に話してもらえる。また昔の生活、養蚕や煙硝づくりについても非常に分かりやすく、頭の中に描きやすい。

尚、ボランティアはこの大戸家のみで、ここで二村氏と別れて他の合掌造りを見に行く。

受付に戻り、「旧岩崎家」を見る。岩瀬家は江戸時代中期に建てられた国の有形登録文化財である。ここでは民俗資料館として内部公開をしている。富山県の五箇山から一九六八年(昭和四三)に移築された。白川郷の合掌造りは「平入り」といって屋根の三角部分が側面になるが、この岩瀬家は「妻入り」といって屋根の三角部分が家の正面にくる、五箇山の伝統的な合掌造りである。入口に大八車の車輪や木製のはしごなどが掲げている。



岩崎家外観、樹木に囲まれている。内部にあった鎧二着と展示してある民具。

まず入り口を入ると昔の防寒具の蓑や網傘やソリ、カンジキ(昔の藁製の長靴)なども一面に展示してあった。雪深い土地ならではの民具だが、これだけ沢山見たのは初めてだった。それから大きなガラスケースに入った鎧が二着あった。地元八王子に「うかい鳥山」にも、五箇山の合掌造りが移築され、料亭として使われているが、食事をせずに内部見学だけでも可なので、見に行ったことがあったが、そこでも鎧が展示してあった。

さらにお雛様のような土人形が沢山展示してあった。上段は男女二体の人形だが女性や武者人形も展示してあり、色あせもなくて色彩豊かだ。

合掌村に入館し、二村氏にガイドを受けている間、さかんに女性の呼び込みの声が響いていた。岩崎家の前の通路を隔てた側にある合掌造り民家は「影絵昔話館しらすぎ座」である。一階部分の樋の上に「影絵昔話館 しらすぎ座」と書かれ、入り口の暖簾にも「しらすぎ座」と書かれている。屋根が苔むしているのが分かる。ここは日本で唯一の影絵劇場であり、劇団「かかし座」によって、下呂温泉の由来である、一羽の傷ついたしらすぎが温泉のありかを教えた「しらすぎ伝説」や、下呂市、下呂温泉に伝わる伝説や昔話を、繊細なデザインと柔らかいハーフトーンシルエットで上演される。

「劇団かかし座」は、日本最初の現代影絵専門劇団で、一九五二年(昭和二七)に創立され、以来六〇年以上、独自の手法で影絵の世界を拓き、活動分野はテレビ、舞台、出版など多岐にわたる。興味があったので入館してみたら、親子連れなど、結構人が入っており、客席は升席に座布団がしいてあり、正面のスクリーンに影絵が映し出される。私が観たのは飛騨小坂の伝説、「力持ち小太郎」だった。

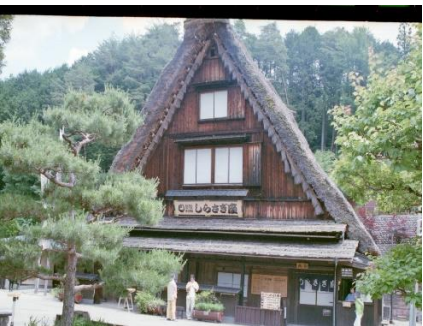
戦国時代、下呂の北、小坂地域の寺に戦火が襲い、村人たちは燃えかけていた大きな仁王像を必死に川に運び、流れ去ってしまわぬことを祈りながら放った。正直で働き者の若者小太郎の夢枕に仁王様が立たれ、お告げ通りに河原に行き、与えられた百人力で仁王像を高台まで運び、苦勞しているからこそ人の気持ちに分かり、人の役に立つことを惜しまない小太郎は、仁王様から授かったその百人力で村人たちの役に立ち、幸せに暮らした。

話の内容はこうであった。私は勿論、これだけ大掛かりな影絵を見たのは初めてだったし、観客と役者が一体になり、一つの作品を演じている空間を体験できた。

園内には食事処もある。しらすぎ座の隣、「旧伊並家」は合掌茶屋でめん処、少し歩いて大戸家の裏側に食事処と売店の合掌造り民家「市倉」がある。ボリュームある定食を食べたかったので市倉で食事にした。

それから、これは事前予約が必要だが、市倉の隣にある合掌造り民家「飛騨工

房」では、陶芸の絵付けロクロ、手びねりや紙すき体験ができる。絵付け体験は、焼き物はすでに一輪差しや皿などが出来上がっており、体験者は下絵の中から好きな絵柄を選んで、筆で色付けをする。絵付け自体が初めてだし、この際だからと予約を入れて、絵付けを体験してみた。下絵の図柄ががすで沢山あるので、それを見ながら書いて色を付ければいいだけだから、思っていた以上に簡単であった。後は窯で焼いて、送料を払ってゆうパックで送ってもらえる。



影絵が鑑賞できるしらすぎ座、水車の近くにある食事処市倉と陶芸・紙漉き体験ができる飛騨工房。

他にも円空館があり、ここでは円空仏を中心に下呂にゆかりのある円空について紹介している。円空（寛永九年 一六三二から元禄八年 一六九五）は、全国に円空仏という独特の木彫り仏像を残し、生涯に十二万本の仏像を彫り、現在までに五三〇〇本が発見され、北海道、青森から三重、奈良までに及んでいる。円空仏に興味のある方にはお勧めの場所である。

合掌造り民家を見終わって、歳時記の森という歓迎門をくぐって地下道を歩くと「茶房万古庵」に出る。この奥に森の滑り台がある。第一滑り台と第二滑り台とがあり、人ひとりが入れるぐらいのスペースに金属のローラーが沢山ついていて、勢いを付けて滑り降りる。かなり早いスピードで滑るので、スリルを味わいたい方や子供にもお勧めしますが、ズボンのポケットに財布やスマートフォン等を入れて滑ると、途中で投げ出され、滑り台の周りの木に引っかかってしまい、後で受付にてそれらを受け取る羽目になるので、ポケットに入れている物は他の場所にしまってから挑戦してください。

こうして、下呂温泉合掌村を見終わって、循環バスに乗って宿に戻った。

世界遺産登録二〇周年記念 「五箇山民謡祭 第六四回富山県民謡民舞大会」
二〇一五年六月六日土曜日。会場、菅沼五箇山合掌の里。

この旅行の前、五箇山観光協会のホームページ上にて五箇山で民謡祭を開催することを知った。五箇山のみならず、県内外の民謡が一堂に会する競演とも書かれており、出演する民謡保存団体も明記されていた。

何度も五箇山の記事で書いているこきりこ唄や麦屋節の保存会、富山県立南砺市平高等学校郷土芸能部、越中八尾おわら保存会など以外にも、初めて見るような民謡保存会やさらに輪島市の能登麦屋節民謡保存会も出演していた。演目だけで二〇近くあり、ほぼ一日がかりの祭りだったため、今まで何度もコメントしている五箇山の民謡は避けて、特に印象に残った他の民謡だけを書いていく。

当日はどんより曇った上に蒸し暑く、開催直前には小雨がぱらついていたのでレインコートを羽織ったら蒸れて更に汗まみれになってしまった。各民謡を一眼レフカメラやコンパクトカメラで撮影していたために、お昼ごはんを食べそこない、同時開催していたなんとうまいもの市には行かず、祭りの終了間際に、売れ残りそうな焼きそばを食べただけに過ぎなかった。また会場は老若男女様々な人が来ており、席はほぼ満席だったように見えた。

菅沼合掌の里のバス停で降りて会場に行くと、五箇山民謡祭ののぼりが立っていて、五箇山料理を販売するテントもあった。前方は野外でパイプ椅子が並べられ、後方はテーブル付きテントで、舞台奥に合掌造りの大きな模型があった。

午前一〇時より開催され、実行委員長から開催のコメントがあった後には、砲術演武として五箇山塩硝鉄砲隊による、火縄銃の実射が行われた。陣笠に陣羽織を羽織った男性を先頭に、女性たちで構成された鉄砲隊だった。

テレビ以外で火縄銃の実演を見たのは初めてで、かなり大きな音に驚いた。

私が一番印象に残ったのは、滑川市（なめりかわし）の新川古代神保存会による新川古代神（にかわこだいじん）だった。新川古代神は、「はねそ（羽根曾）」を原型とした盆踊り歌であり、由来は、寛永年間（一六二四〜一六四三）に古大仁という僧侶がお盆の一三日の夕暮れまでに提灯松明を両手に振りながら唄い口ずさみ、霊を迎えに行ったことが始まりとされる。実際に、白と青の混じった着物をきた男性たちが、両手に松明を持ち、舞台の下の空間で踊った。舞台の上では女性たちが日の丸の扇を手にしており、その後ろには三味線や歌い手などがいた。松明を使って踊る民謡があることを初めて知ったし、勿論見たのも初めてであった。

前述したとおり、この日は蒸し暑く、松明を持ちながら踊るのはさぞかし熱い

だろうと思っていたが、踊り手は一心不乱に踊っていた。

次は、小矢部市（おやべし）願念坊踊保存会による「なげ 奴さん お客さん 六法 吃又（どもまた）おいらさん 小大臣」だった。この踊りは戦国時代に織田信長による石山本願寺との合戦の際、本願寺は全国の門徒を集めて抵抗し、十一年間落城せず、天正八年（一五八〇）の講和の際、長年の戦いに苦しんでいた門徒たちによって喜びのあまり法衣のまま乱舞したのが始まりで、その踊りを小矢部などから参戦していた門徒や僧が帰郷して伝えたといわれている。法衣をまとい、ねじり鉢巻きに縄帯をして、手甲・脚絆にわらじ履きの坊主姿や法被に相撲の化粧まわしのような前掛け姿の子供が、鉦・太鼓・三味線などで囃子にのって身振り面白く踊り、また同じ坊主姿が二重の笠の棒に「念願坊」「天下泰平」の行灯をつけた「ダシ」を持ち歩き回った。

本願寺合戦のことは五箇山の煙硝を使って戦ったという話を聞いたことがあるが、その合戦の裏にこのようなエピソードがあったことを初めて知った。

その前に踊られた氷見市の「氷見網起し木遣り保存会」による「氷見網起し木遣り」も印象深い。木遣りは、木を引き材木を運搬し「がめかち（建物の基礎の石を打ち固める作業）」を打つときに唄われたもので、江戸時代末期に富山県氷見一帯のマグロ・ブリ漁の重い網を起こすための威勢のいい木遣り唄が起源で、以来二〇〇年余歌い継がれてきたが、近代化の影響によっていつしか歌声は途絶え、そこでこれを後世に残そうと一九六八年（昭和四三）に保存会が結成されて活動を続けている。この唄は網を手繰り寄せる唄は前唄と、網を起こしきる本唄からなっており、踊りは太鼓と唄に合わせて女性の踊り手が布を張って波を演出し、男性が櫂を手に漁場の定置網まで船を漕ぎ、重い網を力合わせて起こす一連の動作を勇壮に表現する。





松明を持って踊る新川古代神、カラフルなダシが登場する願念坊踊り、波と櫂で大漁を表現する氷見網起し木遣り、五箇山塩硝鉄砲隊による砲術演武。

偏に民謡といっても色々な踊りと演目があり、歴史も色々あるものだと見て感じて。

最後に越中五箇山こきりこ唄保存会による「といちんさ」、「お小夜節」、「五箇山追分」をもって無事に終了した。合掌の里から世界遺産バスに乗って本日の宿、五箇山荘に戻ってすぐに温泉に入って汗を流した。

民謡祭と全く関係ない話になるが、私は今年二〇一六年五月まで古本の入力の仕事をし、様々な本を扱ってきた。その中で、以前、御母衣（みほろ）の遠山家を取材した際にコメントした『瀧井孝作全集 第六卷』中央公論社 昭和五四年二月発行。（昭和五年 一九三〇年一月六日。『週刊朝日』第一八巻第二二号。「現代日本紀行文学全集」ぼるぶ出版。）などを発見して紀行文を書く時の参考にしたが、今回も似たような状況で五箇山を舞台にした推理小説を発見した。

『首桶伝説 飛驒・五箇山の秘密 菊村到 光文社新書 昭和五九年第一刷』である。約三〇年前の本であり、シナリオ作家の主人公が画廊でたまたま見た絵に心奪われ、それが五箇山の風景であり、自分の叔父も五箇山出身のを知ってから、自分の身の回りで不幸な死が頻発し、終戦直前の狂気のような事件を知ることになるという内容である。当然世界遺産認定前の、まだ今ほど観光地化されていない五箇山が描かれている。国民宿舎の五箇山荘や流刑小屋、西赤尾の奥にある、すでに廃村した首桶村（架空の村、おそらく桂村のことだと思われる。）が登場する。

著者の菊村到氏は、一九二五年（大正一四）に生まれ、一九九九年（平成十一）

に亡くなった。一九四四年（昭和一九）に仙台陸軍士官学校に入学し、戦後早稲田大学に入学して作家活動をはじめ、一九五七年（昭和三二）に文学界新人賞を受賞した。菊村氏はこの作品を書くために五箇山を実際に訪問したものとと思われる描写がある。没する四年前に五箇山が世界遺産に認定されたことを当人はどう感じていたのだろうか。五箇山に何度も訪問し、またネット上で五箇山に関することを多数検索しているが、（私は主に旅行記事だけを検索しているからだと思うけれど）、この本について言及されているのを見たことがなかった。菊村氏は有名な推理作家だったようだが、この作品は恐らく多くの作品中の一つに過ぎなかったのかもしれない。作品自体は臨場感あふれ、最後のシーンはハラハラし、あたかも火曜サスペンス劇場のような実写版を観ているような感覚に陥り、一気に読んでしまう筆者の筆さばきは巧みである。それから、他の作家のサスペンスに非常にありがちな、主人公とそれに絡みつく美女との性描写が全くないことも好感が持てる。執筆後三〇年を経て、筆者の死後に作品をたまたま知るといいうのも、古本を扱う仕事をしていたからではないかと思えてならない。

各種データ。

下呂温泉合掌村

〒五〇九・二二〇・二 岐阜県下呂市森三三六九

電話番号 〇五七六・二五・二三九 FAX 〇五七六・二五・四二八三

営業時間 午前八時三〇分から午後一七時まで。最終入場受付時間午後一六時三〇分。

入場料金 大人八〇〇円 子供（小中学生）四〇〇円

二〇名以上の団体 大人七二〇円 子供三六〇円

URL <http://gero-gashho.jp/>

（ポランティアは要予約。）

下呂温泉合掌村内「影絵昔話館しらさぎ座」

公演日 前期二月二〇日から六月一二日。後期七月一六日から十一月二日。

上映時間 午前一〇時三〇分 十二時 十四時十五分

演目 午前一〇時三〇分と午後一四時一五分は「考子ヶ池（こうしがいけ）」

十二時 「しらさぎ伝説」と手影絵ショー

休演日 水曜日。

観劇料 大人・子供（三歳以上）三〇〇円。

『首桶伝説 飛騨・五箇山の秘密 菊村到 光文社新書 昭和五九年第一刷』

（一般書店での入手困難。アマゾンにて購入。）